

第13回 ネパール山岳地帯の通行人

徒歩を唯一の交通手段とするヒマラヤ山岳地帯において、人々の日常生活の中での移動、あるいは物資の流通は一体どの程度の規模でなされているのであろうか。本稿は、地域間交流の側面を重視する立場にたって、ヒマラヤ山民の行動状況を、具体的には通行人に面接することによって、実証的に考察しようとするものである。

調査：1977年11月20日にキャンジンゴンパ(3、820m)を出発して26日にトリスリバザール(640m)に到着するまで、毎日昼食時の1時間半を除いて午前8時から午後4時半ころまでの約7時間を調査にあてた(図4)。出会った人の総数は425名であった。彼らに対して、名前、年齢、性別、出身村、行き先、経由地、行動目的、民族名を聞き取った。

分析：上記の調査項目をクロス集計することによって、通行人の年齢、性別、民族を出身村落別、行動目的別に分析し、通行人の流出・流入状況からランタン街道沿いの集落の階層性をみつけ、さらには行動目的別に通行人の行動圏を明らかにした。

図5、6のスケッチは地理研OBの雨宮智子氏による。

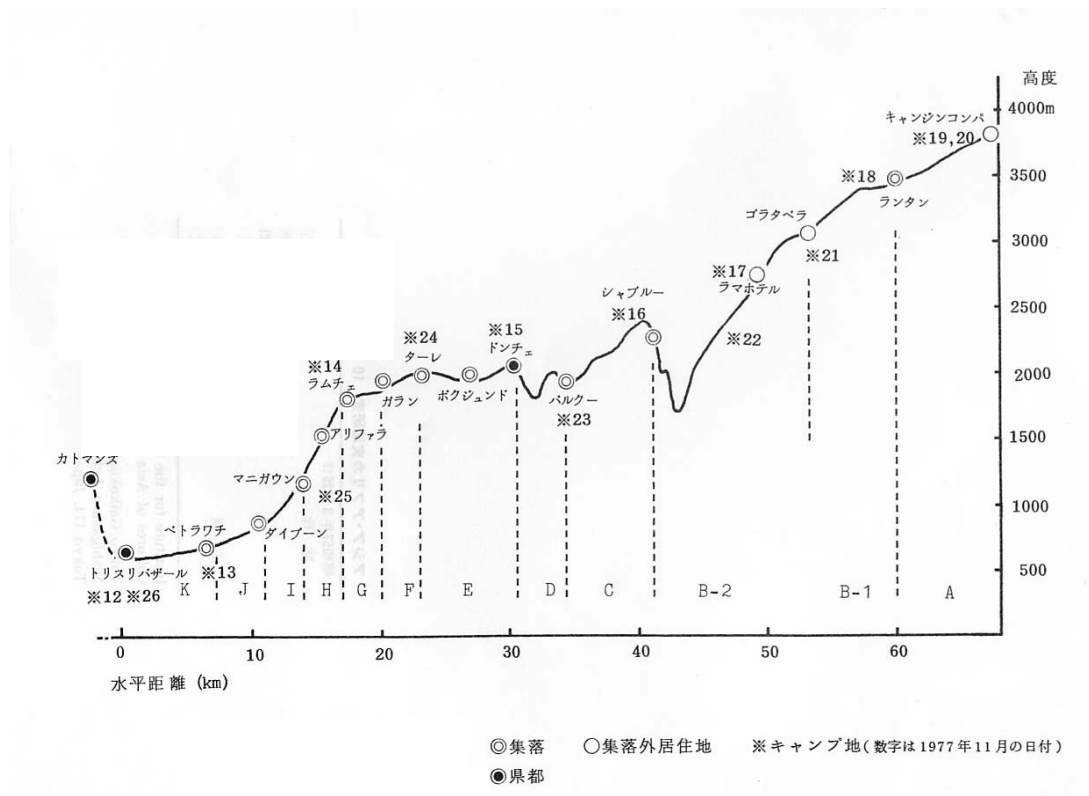


図4 ランタン街道行程図

「ネパール・ランタン街道における通行人の行動圏」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 <ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究>YAK5、1982、p89 より

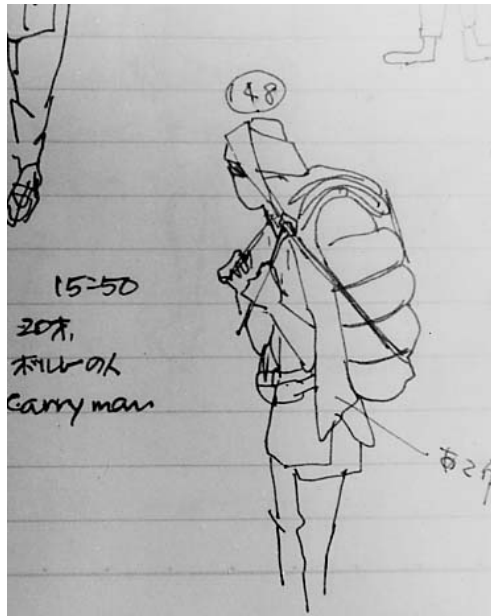


図5 通行人148



図6 通行人193、194

調査結果をかいつまんで示せば次の通りである。

まず、ランタン街道沿いの集落の人々はヌワコット地区の中心地のトリスリバザールおよびラスワ地区の中心地ドンチェを2大目的地とし、首都カトマンドゥへの訪問は、比較的近距离にあるにもかかわらず高級品を購入するか、遠方へポーターに行くか、何か特殊な場合に限られており、カトマンドゥは彼等の日常行動圏から除外されていた。

行動目的として代表的なのはポーター稼ぎと商人稼ぎであり、これは最奥地ランタン村を除いて各村においてほぼ共通してみられ、運搬物資としては米・小麦が最も多かった。そして彼等の行程ルートは自村を出てトリスリバザールで仕入れ、ドンチェへ運搬、販売し、自村へ帰るといった4～6日行程をとるものが大半を占めていた。農牧業関係の移動、知人訪問のための移動は各村から1日以内の範囲で多数なされていた。

また、物資の購入のための移動は各村からトリスリバザール、ドンチェ等の商業機能を持ったところへなされていた。とくにランタン村からは村中総出の36人もの人が往復10日間もかかるのもいとわず、トリスリバザールまで米を買いに来ている。この事実は、単にその行動圏が広いというだけでなく、自村では高所故栽培不可能な米が大量に持ちこまれ重要な食糧となっている点でネパール山間僻地村の一つの典型を示しているように思われる。同じような位置にある村落については今後の調査を待たねばならないが、ともかくもランタン村が自給自足の閉鎖的な村でないことは注目されよう。

上記の他、多少本論と順序が前後するが。通行人の年齢は20代を筆頭に10代、30代とつづき、若い世代の人が多かったこと、性別は男性が圧倒的に多かったこと、民族に関しては高所においてはタマン族が、低所においては複数の民族が混在していたことなどが判明した。



写真 36 アンナプルナ山群とマチャプチャリ（中央尖った山）



写真 37 エベレスト（右の尖った山） マウンテンフライトの操縦席から



写真 38 スワヤンプナート寺院（目玉寺）